

特 249

992

日蓮主義の心も道

日蓮宗宗務院教學部



始



特249  
992

# 日蓮主義の正しき道

發行所寄贈本

## 一序 言

日蓮聖人の教が、  
 指導し來つた事は人々の能く知る處である。大正から昭和へかけて、吾國民は對内的にも  
 對外的にも種々の試練を経て來た。第一には思想上、第二には經濟上、第三には政治上、  
 國民は口々にそれを國難來と叫んだ。國難來を叫ぶ迄に吾國民はどれだけ艱難苦難を  
 居るか分らないのであるが、それを單に個人の問題と考へないで、國家全體の問題  
 即ち國難として體驗せるところに、吾國民性の特色は存するのである。更に一昨年の日支

事變は國民をして全く生命線上に立たしめ、尋で國際聯盟に於ては名譽ある孤立となり、  
 世界經濟會議の失敗は世界經濟の愈々多事多難なるを明かにするに及んで、國民は國家未  
 曾有の大難に直面する祖國を發見し覺悟するに至つた。今日は所謂非常時である。朝野を



問はず、上下を論ぜず、老若男女苟も國民たるものは、一身一家の小事を捨て、國家の大事をその双肩に擔ふて立たねばならぬといふ狀勢が、正しく現下日本の非常時である。

この非常時を打開するには、所謂國策の樹立も急務であらう、思想對策も必要であらう、教育の改造も必要であらう、經濟政策の確立も必要であらう、それら専門家の工作をも必要とするであらう。然しながらこれ程迄に押し逼つた國難は、根本から一大信念を湧起するに非ずんば到底打開すること能はずとは、國民の既に反省し自覺し體驗せるところである。この時に當つて國民が指導原理を日蓮聖人の教に見出し、その信仰氣魄を聖人の人格に仰がんとするは、極めて當然の事といはねばならぬ。

然るに近時年少氣銳の士にして、世相の現状を慨き國運の前途を憂ふるの餘り、テロ的  
直接行動を以てし、一舉にして國家の改造を試みんとせる事件が、頻々として起れるを見る。それ等青年の憂國慨世の至誠と純情とに至りては、何人と雖も同情措く能はざるところであるが、其の直接行動を敢てするに至りしは世人のまた等しく遺憾とするところである。殊に日蓮聖人の金言を引いて、その直接行動の心境を告白せるものあるに對して往々世人をして日蓮聖人の教とテロリズムと、何等かの關係あるやに想到せしめたることは、

平生日蓮主義を奉ずる吾人の最も遺憾とするところである。また最近宗教革新を企圖せる「或一團」の如きは餘りに奇矯にして、そが日蓮聖人の名に於て日蓮主義を奉ずと自稱するが故に、益々以て世人の疑惑を増大せしむるものがある。固より日蓮聖人を信じ日蓮主義の正道を歩むものにあつては、その信解に動搖なしとするも、世間往々テロリズムを以て、日蓮主義に出づるものなりとの誤想を懷くものがある。是れ吾人が日蓮聖人の教とその人格とを説き、以て日蓮主義の向ふ處を明かにする所以である。

## 二 日蓮聖人と立正安國論

日蓮聖人の宗教は法華經を世界に實現することである。法華經はこれを單に山林に於て行ひすますべきものでなく、また單に殿堂に在つて解説すべきものでなく、人間生活に、國家生活に、實現する處にその本然のその永遠の大生命は存するのである。法華經の行者として出發された聖人が、宛も水の低きにつくが如く實現の一途に進まれたことは理の當然で、この法華經實現の宗教が、即ち立正安國論となつて發動したのである。

立教開宗後の八年、文應元年七月十六日、聖人は立正安國論一篇を鎌倉幕府に献上せら

れた。立正安國論は警世憂國の建白書といふよりも、それは寧ろ法華經の教であり聖人の宗教であるが故に、聖人の一代はこの立正安國論の實現運動を以て一貫して居る。聖人の一生は立正安國に始まり、立正安國に終つたといふても差支ない。その事は聖人自ら撰時鈔に於て語るところである。所謂

余に三度の高名あり、一には去し文應元年七月十六日に、立正安國論を最明寺殿に奏し  
たてまつりし時、宿谷の入道に向つて云く、禪宗と念佛宗とを失ひ給ふべしと申させ給  
へ、此事を御用ひなきならば、此一門より事起りて佗國にせめられさせ給ふべし。  
二には去し文永八年九月十二日申の時に、平左衛門尉に向つて云く、日蓮は日本國の棟  
梁也、予を失ふは日本國の柱礎を倒すなり。只今に自界反逆難とて同志打して、佗國侵  
逼難とて、此の國の人々他國に打殺さるゝのみならず多く生擒にせらるべし、建長寺、  
壽福寺、極樂寺、大佛、長樂寺等の一切の念佛者、禪僧等が寺塔をばやきはらいて、彼  
等が頸を由比濱にて切らずば、日本國必ず亡ぶべしと申し候ひ了んぬ。  
第三には去年文永十一年四月八日、左衛門尉に語つて云く、王地に生たれば、身をば隨  
へられたてまつるやうなりとも、心をば隨へられたてまつるべからず、念佛の無間獄、

禪の天魔の所爲なる事は疑ひなし。殊に眞言宗が此國土の大なるわざはひにては候なり。  
大蒙古を調伏せん事眞言師には仰せ付けらるべからず。若し大事を眞言師調伏するなら  
ば、いよいよいそいで此國ほろぶべしと申せしかば、頼綱問うて云くいつごろ寄せ候べ  
き。予言く、經文にはいつとはみへ候はねども、天の御氣色いかり少からず急に見へて  
候。よも今年は過し候はじと語りたりき。

第一の諫曉の爲めに、松葉谷艸庵は焼打にせられ伊豆三年の流罪となり、第二の諫曉の  
爲めに龍口の首の座に据ゑられ佐渡四ヶ年の流罪となり、最後第三の諫曉を終へて身延九  
ヶ年の隠棲生活を開展して居られる。即ち聖人一代の生活は、全く以て立正安國論を軸と  
して開展せるものである。かやうに聖人の宗教は立正安國を以てその基調と爲すが故に、  
山林に於てせず、殿堂に於てせず、直ちに街頭に出で、民衆と共に、その中にも特にまた  
國家の中心勢力に法華の正法を植ゑ付け、法華經の上に國家を建設せんとされたのである。  
此の重大なる一點、聖人の宗教がいつでも、憂國慨世の人々の肺腑に觸れずんばやまざる  
所以である。

然しながら立正安國論を以て、單に聖人の愛國運動と爲すならば、それは聖人の眞精神

を理解するものといふことは出来ない。聖人の立正安國は法華經の大生命から生れ出た、諸法實相の根柢から湧き出た宗教である。それは愛國運動以上の愛國であり、強いて言はゞ宗教即愛國であり、實に佛國土實現の運動である。

### 三 佛國土實現の運動

日蓮聖人の立正安國の運動が、佛國土實現の運動であることは、立正安國論に於て、聖人が明白に教ふるところである。曰く

汝早く信仰の寸心を改めて、速に實乗の一善に歸せよ。然らば則ち三界は皆佛國也。佛國其衰へん哉十方は悉く寶土也。寶土何ぞ壞れん哉。國に衰微無く土に破壞無くんば、身は是れ安全にして心は是れ禪定ならん。此の詞此の言信ず可し崇む可し矣。

即ち立正安國論に於て、聖人の期せられた處は、此の世界に於ける佛國土の實現である。佛國土とは佛を教主と仰ぐ世界の謂である、教ふる佛と教へられる人間との關係が、この世界の根本原理である。吾人は今此の道理を平易に説明するであらう。

人間として吾人は、先づ第一に家庭生活を營む、家庭生活は人間發祥の領土である。慈

父慈母の上にもこそ、家庭生活は築かれて特色とする處はその慈愛にある。若し家庭生活なくしては人間は慈愛といふことを全く缺くに至るであらう。然しながら、この家庭生活は親以上の親たる佛に依つて導かるゝのでなければ、その慈愛は盲目となり、我儘となつて、その本來の生命を滅却するであらう。この事は慈愛餘りありながら、而も尙吾子を教ふることの出来ない人の親の痛切に體驗するところであらう。

吾人は第二の人間生活として、教育生活を發展する學校に於ける教育生活、社會に於ける教化生活がそれである。教育生活の特色とする處は聰明であつて、若し教育生活なくんば、人間は人生と世界とを知る明もなく、自らの迷妄を是正する道をも知ることが出来ないであらう。この生活は師以上の師たる佛に依つて導かるゝのでなければ、遂に人間の聰明は失はれるであらう。教ふれば教ふる程苦しみ迷ふ今日の教育に於て、人々は當に三思三省すべきである。

第三の生活として、人間は社會生活、嚴密には國家生活を發展する。この生活の特色とする處は權威であり、權威の存在に依つて人々は相譲り相戒め諧暢の人生生活を維持し發展することが出来る。然しながらこの生活に於て缺くる處は慈愛と聰明である、この生活

も主以上の主たる佛に依つて導かるゝのでなければ、權威は暴力と化して破壊の運命を辿るであらう。

佛を教主と呼ぶのは、人間の教育者の謂であり、人間に對する佛の教であるからこれを佛教と呼ぶのである。人間生活の全領域に、即ち慈愛の家庭生活の上にも聰明の教育生活の上にも權威の國家生活の上にも、主師親の佛を仰がしめんとするのが佛教であり、法華經であり、特にまた日蓮聖人の佛國土實現の運動である。法華經に於て佛は其大智慧と大慈悲とを傾け盡して人間を教育されて居る。法華經から生れ出た聖人の立正安國の運動も佛國土實現の運動も、亦その智慧と慈悲とを以てせる教化運動である。斯かる聰明と慈悲との宗教に、テロリズムを容るゝ餘地が果して存するであらうか。テロリズムを引出さんとするが如きは、寧ろ引出すものゝ罪である。

日蓮主義とテロリズムとを結び付けんとするものは、多く日蓮聖人を以て國家主義者と見ることに原因する。勿論、聖人ほどこの日本國を熱愛された人は、またあるべしとも見えない。聖人は實に法華の正法を以て、この國を守護された第一人者である。聖人の立正安國の運動は王佛冥合わうぶつめいごうに到つて、其實現の結論を見出すものである。然しながらその立正

安國といひ、王佛冥合といふものは、法華經的立場から眞理の全體的立場からするものであつて、世の所謂國家主義者と同日にして談ずることは出来ない。況んや侵略主義の如く、征服主義の如く、考ふるに至つて、法華經と日蓮聖人とを誤ること、最も甚しきものである。聖人の立正安國は佛國土實現の運動であつて、テロリズムの存在は之を許さざるものである。

また特に撰時鈔の文ぶんに於て、既に引いて置いた如く、聖人の詞に過激の調あるを以て、往々テロリズムに因縁付けようとする。然しながらそれはその聰明よく未萌みもを知るが爲めに、またその慈悲餘りあるが爲めである。慈悲の鞭であり病を醫す爲めの灸やいである。これを以てテロリズムの因と爲すが如きは、聖人の慈悲の心に通ぜざるの致す所である。それ故に聖人は塔寺を焼拂ひ、寺僧の頸を切れなど獎勵された事は、未だ曾て一度もない。寧ろ外から來る迫害を飽迄忍受せよと教へられたのである。テロ的行爲は寧ろ日蓮聖人に加へられたのであつて、斷じて日蓮聖人からは出なかつたのである。殊にまた斯かる過激な言葉は國主に對する諫曉である。迷へる誤れる當時の鎌倉幕府に對する諫言である。式目政治を以てその誇とせる鎌倉幕府が、日蓮聖人の言葉に聽いたならば、幕府は幕府として

自ら合法的手段に出でたであらう。聖人の過激な言葉の發せられた場合をも顧みずして、直ちに之を以て、テロ的行爲の本據と考へるが如きは、抑も聖人の人格的感化を受けざるの致すところである。

#### 四 日蓮聖人の人格——慈悲忍辱の人

佛は大智慧と大慈悲との持主である。佛にあつて慈悲から出ない智慧はなく、智慧の伴はぬ慈悲はないのであるが、慈悲は智慧よりも一層立ち入つた佛の心である。法華經の行者たる日蓮聖人も亦智慧と慈悲との大人格であつた。聖人は「智者に吾義破られずば用ゐじとなり」とまで確信された智者でありながら、自らは「日蓮が智解は天台傳教には千分が一分も及ぶ事なけれども、難を忍び慈悲のすぐれたる事畏れをも懐きぬべし」とて慈悲忍辱を以てその本領とされた。この慈悲忍辱の聖人を仰がないで、聖人を以て英雄僧、豪傑僧と爲し、徒に攻撃破壊の權化の如く考へるに至つては、聖人を知らざるの最も甚しきものである。

先づ吾人は、聖人が法華經の行者としてその一代に行ぜられた勸持品二十行の偈を觀る

であらう。云く、

諸の無智の人の、惡口罵詈等し、及び刀杖を加ふる者有らん。我等皆當に忍ぶべし。此の如き輕慢の言を皆當に忍んで之を受くべし。濁劫惡世の中には多く諸々の恐怖有らん。惡鬼其身に入つて我を罵毀辱せん。我等佛を敬信して當に忍辱の鎧を著るべし。是の經を説かんが爲の故に、此の諸の難事を忍ばん、濁世の惡比丘は佛の方便隨宜所説の法を知らず、惡口して擧聲し數々擯出せられ、塔寺を遠離せん。是の如き等の衆惡をも佛の告勅を念ふが故に、皆當に是の事を忍ぶべし。

と、是れ徹頭徹尾、忍辱の行を説いたものである。更に吾人は聖人がその典型とされた上行菩薩の人格を觀るであらう。曰く

巨身にして大神通あり、智慧思議し匡し、其志念堅固にして大忍辱力あり。難問答に巧みにして、其心畏るゝ所なく、忍辱の心決定し、端正にして威徳あり、十方の佛の讚めたまふ所なり。

忍辱は實に上行菩薩の中心性格である。聖人は開宗立教のその日、故郷房州を追放されても、立正安國論獻上の翌月、松葉谷の艸庵を焼打にされても、法華經故に伊豆の伊東に

流罪されても、文永八年九月十二日龍口の首の座に据ゑられても、乃至その年の十月佐渡が島に流されても、いつでもこの大忍辱力を以て一切の迫害を忍受された。そこに聖人の聖人たる所以の人格はある。折伏戦闘の聖人のどこにもテロリズムはない、寧ろ聖人はこの一代を通じて世界のテロリズムを堪へ忍ばれたまで、ある。嘗に數々の諸難を忍受されただばかりでなく、その迫害を加ふる人々に一倍の慈悲をかけられた聖人であつた。「諸の悪人は又善智識なり」とも「願はくは我を損ずる國主等をば最初に之を導かん」とも仰せられて、聖人は憎悪に酬ゆるに慈悲を以てせらるゝばかりであつた。

昔、常不輕菩薩が「我深く汝等を敬ふ汝等當に作佛すべし」と唱へて、人間を禮拜讚歎して暮されたやうに、聖人は一切の男女をば我先生の父母と觀て南無妙法蓮華經と高らかに唱へ、山と重なる大難を忍受しつゝ、その怨嫉の人々を慈愍しつゝ、明し暮された人であつた。そのみか、聖人はそれ等の迫害、それ等の諸難のすべては、過去生に於ける吾が法華誹謗の罪とさへ觀ぜられた。是れ前生の重き罪を轉じて今生に軽く受くるものなりとさへ歡ばれた。龍の口の大難の後、依智から佐渡へ流され行く流人日蓮、殊には塚原の雪中にして開目鈔を選述せられた聖人を觀よ。本化上行の大自覺に輝いた聖人は、また憊

悔滅罪慈悲忍辱の行者であつたのである。

若し夫れ、身延九ヶ年の聖人の生活を仰ぎ見るとき、そこから聖人の慈悲は泉の如く滾々として盡きせず流れ出るものがある。法華經故に二十餘年戦ひに戦ひ通されて、行者として爲すべきだけ爲し盡されて、そして身延山中雲深く入つて、心ゆくまで佛に仕へ法華經を讀誦し、この國の爲めにこの民生の爲めに熱禱をこめてのみ暮されたあの聖人の純信仰的生活は、慈悲そのものでなくて何であらう。法華經故の折伏戦闘のときは、聖人の慈悲の心を迫害の人々の諒解する由もなく、またその切迫した凡ての狀勢はその心情を吐露するに相應はしからぬものであつた。然るに戦うぎての身延の靜かな生活は、當時の法華折伏の戦とその戦の已むに已まれぬ慈悲の心とを語るに最も相應はしい境界であつた。即ち諫曉八幡鈔に

今、日蓮は去る建長五年四月二十八日より、今年弘安三年十二月に至るまで二十八年が間、又佗事なし只妙法蓮華經の七字五字を、日本國の一切衆生の口に入れんとはげむ計り也。此れ即ち母の赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲也。

とあるがそれである。今日から振り返つて見れば聖人の法華折伏がこの大慈悲から出て



居ることが立所に分るものを、どうして當時<sup>せんしつ</sup>怨嫉<sup>うんしつ</sup>の人は、その溢る、ばかりの慈悲を、くみとる事が出来なかつたであらう。聖人は争の人でない戦の人でない、寧ろ慈しみの人であり和ぎの人である。

また聖人の慈悲はその當時の人々の上にそ、がれたばかりでない、寧ろ今日の吾々の上にこそそ、がれたものである。大難小難その數を知らぬ二十餘年の法華經の修行を貫き通して而も身延九年の純乎たる信生活、それは慈悲を以て二十餘年の折伏戦闘の生活を根據づけたものといへよう。そして法華經を讀みに讀んで、南無妙法蓮華經を虚空にも餘りぬべき程唱へ唱へて唯々、佛とのみ明し暮された生活は吾々に遺された慈悲の生活でしかなかつたのである。人間へのこれ程偉大なる遺物はないのである。報恩鈔には

日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華經は萬年の外未來までも流るべし。

とあつて、聖人の慈悲の盡きる時はない。南無妙法蓮華經の盡きせぬ如く、聖人の吾々にかけてられたる慈悲もまた盡きる時はないのである。

この慈悲の大人格から、聖人の法華經の修行、聖人の宗教殊に立正安國の運動が起つたのである。吾人は世の誤想者迷想者に、唯一言「日蓮聖人の慈悲の人格を觀よ」と言はん

と欲するものである。

## 五 結 語

以上、世の誤れる日蓮主義觀に對し、その正しき道を説き、特にまた聖人の人格を明かにしたのであるが、尙一二の言を附け加へ以て結語を爲さうと思ふ。

法華經には二大法門が説かれてある、その一は佛の大智慧であり、その二は佛の大慈悲である。佛はその聰明よく諸法の實相に通達し、その聰明よく無邊の衆生を開導するが故に、大智慧の方<sup>かた</sup>であり、佛は一切を愛護して餘す處なきが故大慈悲の方である。佛の然るが如く日蓮聖人も亦智慧と慈悲との大人格である。正義といはずして智慧といひ、愛といはずして慈悲といふところに佛敎の特色は存するのである。そしてこの智慧と慈悲とはまた吾々人間の根本の性格であらねばならぬ。

然しながら吾々人間には、その前に先づ信が要求されねばならない。佛はその智慧と慈悲とを以て教ふるものである。人間は教へらるゝもので、教へらるゝものに先づ以て信がなければならぬ。信とは佛の敎に答へる人間の心の謂である、それ故に疑なきを信といふ

とも、隨順を信と爲すとも、信は道の元功德の母とも言はれて居る。信とは人間の根本の心、まこと、まごころで所謂至誠天に通ずるもの是である。佛は信の心へのみ宿る、信仰の寸心を改めてこそ初めてこの世の佛國土は實現する。日蓮聖人は智慧と慈悲との人格である前に信の人格であつた、聖人は實に信の典型的人格であつたのである。

非常時を打開するものは信の一字であらねばならぬ。世界はその政治經濟軍事外交の工作を爲す前に信でなければならぬ。人間が根本の信地に立つことによつて、世界は初めて聰明と慈悲との世界となつて、正しき道を行くであらう。

昭和八年九月二十五日 印刷 〔非賣品〕

東京市芝區二本榎一ノ一五

日蓮宗務院教學部

發行編輯 兼印刷人 平 間 壽 本

東京市京橋區西八丁堀四ノ八

財團法人日蓮宗布教助成會印刷部

終

